同語反復文の意味はどのように解釈されるか（I）

―― 英語の場合を中心にした考察[1] ――

北海道大学　佐山　公一
北海道大学　阿部　純一

1. はじめに

本研究は(Ⅰ)，(Ⅱ)の2部から構成されている．本研究では，名詞述語文形式の同語反復文(nominal tautology)がどのように解釈されるかという問題を取り扱う．本稿(Ⅰ)では，英語の場合を中心にして，その問題に関する従来の研究を展望し，そこでの議論を整理することを目的とする．

本研究で扱う名詞述語文形式の同語反復文とは，英語においては(1)の形式，日本語においては(2)の形式，をとるものをいう．

(1)　(ART) A be (ART) A.　(A: 名詞; ART: 定冠詞，不定冠詞，または無冠詞)

(2)　AはAである（または，AはAだ）．　(A: 名詞)

このような文形式をもつ同語反復表現は，様々な言語においてよく見られる．たとえば，英語においては(3)のような表現を，また，日本語においては(4)のような表現を，日常生活の中でよく聞く（見る）ところであろう．

(3)　Business is business.

---

[1] On the interpretation of nominal tautology (I): The case of English.

Kohichi Sayama　and　Jun-ichi Abe
(email: sayama@hubs.hokudai.ac.jp) (email: abe@hubs.hokudai.ac.jp)
Department of Behavioral Science, Faculty of Letters, Hokkaido University

本研究は，平成5年度文部省科学研究費（重点領域研究「音声対話」（計画班B），課題番号 05241102）の補助を受けた．

(4)　（しょせん，）　子供は子供だ．

以下，本稿では，“同語反復文”とは(1)または(2)の形式の同語反復文を指すものとする．また，英語および日本語の同語反復文中で繰り返される名詞Aを“反復語”と呼ぶことにする．

本稿(Ⅰ)では，まず，第2節において，同語反復文の意味解釈に関わる研究が，いわゆる“文字通りの意味(literal meaning)”を超えた意味を運ぶ表現の産出・理解に関する研究の中に位置づけられるものであることを述べる．続いて，第3節から本題に入り，同語反復文の意味解釈について何が問題となるのかを，日本語と英語の文例を挙げつつ説明する．第4節では，英語同語反復文の意味解釈に関する従来の研究を展望する．そして，第5節では，第4節での議論を踏まえ，英語同語反復文の意味解釈の文脈独立的な側面と文脈依存的な側面の両面について考察し，議論のまとめを行う．

なお，本研究の後半(Ⅱ)では，日本語の同語反復文の意味解釈に関して，英語の場合と同様の展望と考察を行い，その後に，その意味解釈の（個々の言語を超えた）普遍性に言及する．

2. “文字通りの意味”を超えた意味を運ぶ表現としての同語反復文

Grice(1975, 1978)が“会話の公準(conversational maxims)”を提案して以来，それを基本的な理論的枠組みに据え，文字通りの意味を超えた意味を運ぶ様々な表現を，会話の公準の下位原則に違反する表現として位置づけようとする試みが行われてきている（たとえば，Brown & Levinson, 1978; Levinson, 1983; 金子・佐山・阿部, 1986; Sperber & Wilson, 1986; 山梨, 1986, など）．そうした試みは，“修辞的(figurative)”な表現や“間接的(indirect)”な表現などを包括的に把握し，それらに共通する意味解釈の過程を探って行こうとするアプローチといえる．そのような研究はいずれも，“同語反復文”の使用を，“緩叙法(litotes, meiosis, understatement)”，“誇張(hyperbole, over-statement)”などとともに，会話の公準の下位原則である“量の公準”に違反する代表的な例として捉えている．

他方，こうした試みとは別に，“隠喩(metaphor)”，“アイロニー(irony)”などと呼ばれる表現，あるいはいわゆる“間接的発話行為(indirect speech act)”として機能する表現，等々の理解過程をそれぞれ個別的に扱う研究も盛んに行われるようになってきている．多種多様に存在するそうした研究の中には，たとえば，隠喩の理解に関する Gildea and Glucksberg(1983), Gluckberg and Keysar(1990), Ortony(1979), Ortony, Schallert,

Reynolds, and Antos(1978), などの研究，アイロニーの理解に関する Clark and Gerrig (1984), Jorgensen, Miller, and Sperber(1984), Kreuz and Glucksberg(1989), Sperber (1984), などの研究，また，間接的発話行為の理解に関する Gibbs(1982, 1983, 1984, 1986)の研究，等々が含まれる．そのような状況の中で，近年，同語反復文の理解に関してもいくつかの考察が行われるようになってきている．本研究では，同語反復文の理解に関するそうした研究の現状を展望しつつ，そこでの議論を整理することを本題とする．

3. 同語反復文の容認可能性

同語反復文は，文字通りの意味では，聴者に何ら新しい情報を伝えない．したがって，その意味で，同語反復文は明らかに量の公準に違反している表現といえる．しかしながら，同語反復文は，日常の言語活動の中で充分に意味のある発話として産出されたり理解されたりしている．では，どのような場合に，同語反復文は意味ある発話として容認(accept)されるのであろうか？

文脈から単離され，同語反復文1文のみが与えられた場合を想定してみよう．そして，そうした場合，同語反復文のみからどの程度明確な意味を受け取ることができるのかを考えてみよう．

(5) a. ゴミはゴミだ．
b. ？空は空だ．

(6) a. A diamond is a diamond. (Gibbs & McCarrell, 1991, より)
b. ? A bottle is a bottle. (Fraser, 1988, より)

一般に，日本語を母語とする聴者ならば(5b)よりも(5a)の文意の方を解釈しやすいと感じ，また，英語を母語とする聴者ならば(6b)よりも(6a)の方を解釈しやすいと思うであろう．(5a)や(5b)の例，あるいは(6a)や(6b)の例は，いずれも，(7)や(8)のような慣習化(conventionalize)された言いまわしとは異なる．

(7) (腐っても，) 鯛は鯛である．

(8) Boys will be boys.

また，(5a)，(5b)も(6a)，(6b)も，ともに文としての表現形式は同じである．したがって，

(5a)と(5b)の間，および(6a)と(6b)の間の解釈しやすさの違いは，反復語の何らかの違いから生じると考えるのが妥当であろう．つまり，聴者は，「ゴミ」，「diamond」といった名詞から構成される同語反復文に対しては，解釈を促す特定の文脈や発話状況が与えられなくとも，比較的明確な意味を引き出すことができる，ということである．

今度は，より一般的に，何らかの文脈あるいは発話状況の下で同語反復文が発せられた場合を想定してみよう．文脈・状況が変わると，同語反復文から受け取ることのできる意味はどの程度変わるものであろうか？ (9a)，(9b)の例を見てほしい．

(9) a. いくら小さくても，ダイヤはダイヤだ．十分に価値がある．
　　b. いくら高価だといっても，ダイヤはダイヤだ．命にはかえられない．

我々は，同一の同語反復文「ダイヤはダイヤだ」を，互いに異なった意味をもつものとして受け取る．その解釈の差は文脈の違いからもたらされるといえる．

(5)，(6)の例および(9)の例は，同語反復文の意味解釈の二つの異なる側面を示している．すなわち，(5)，(6)の例から分かるように，たとえ文脈・状況から単離されたとしても，ある種の同語反復文は明瞭な意味をもつものとして解釈され得るということであり，また，(9)の例に見られるように，同一の同語反復文であっても，文脈・状況が変わると異なる意味に受け取られる場合もある（佐山・阿部，1988a，1988b，1991a，1991b，印刷中），ということである．

4. 英語同語反復文の意味解釈に関する従来の研究

これまで，英語では，(1)の形式をもつ同語反復文の意味解釈のあり方について，ある程度の言語学的考察や心理学的考察がなされてきている．そうした考察は，前節の終わりで指摘した同語反復文の意味解釈のあり方をどのように説明しているであろうか？以下，そうした点を中心にして過去の主な研究の内容を述べていくことにしよう．

4.1. Levinson(1983)の研究

Levinson(1983)は，その著書『語用論(pragmatics)』において，文字通りの意味を超えた意味が推論される基本的原理を議論しており，その中で同語反復文の場合にも触れている．彼は，聴者が，会話の公準を基盤とする言語普遍的(language-universal)な推論の原理を数多く有しており，そうした原理の一部を，言語表現それ自体とは関係なく文脈・状況に依存して選択し，個々の言語表現に適用すると主張する．

同語反復文の場合について具体的に言えば，聴者は次のように解釈するという．まず，

同語反復文を，“$\forall x\ (W(x) \rightarrow W(x))$”という論理形式で表される恒真命題を自然言語によって表現したものとみなす．そして，それが，文字通りの意味では，何も新しい情報を伝えておらず，量の公準に違反していることに気づく．聴者は，そうした違反が見かけに過ぎず，実際には会話が協力的に行われているはずであると考える．そして，たとえば同語反復文(10)に対しては，同語反復文が発話されるようなすべての文脈・状況に共通にあてはまる推論の原理を使い，「ひどい状況は戦争では常に起こる．それは戦争の性質であり，その特別な災難を嘆いてもためにならない」とでも表現できるような一般的な意味を推論する．さらには，実際に(10)が発せられる個々の文脈・状況それぞれに適合する推論の原理を用い，文脈・状況ごとに変わる個別的意味を付加的に推論する．

(10) War is war.

要するに，Levinsonの同語反復文の意味解釈に関する主張は，聴者が同語反復文に対して適用する推論の原理が，おしなべて文脈・状況に依存して選択される，つまり，同語反復文の意味が基本的に文脈・状況依存的に決まる，ということである．

4.2. Wierzbicka(1987)の研究

4.2.1. すべての同語反復文に適用される言語知識 Wierzbicka(1987)は，同語反復文の意味が文脈・状況に強く依存して決まるとするLevinson(1983)の考えに反対する．彼女は，特定の文脈・状況によらず，一般的な言語知識さらには同語反復文に特有の表層表現に関する知識（冠詞の有無と種類および反復語の単数・複数に関する知識）を参照するだけでほぼ同語反復文を解釈できると主張する．Wierzbickaは，言語知識の範囲内に，あらゆる同語反復文に共通して適用される慣習化された知識があると考える．彼女は，そうした知識が単語の意味的知識とは異なるが，単語の知識と同様に“意味的不変体(semantic invariant)”であると見なす．彼女によれば，同語反復文を解釈する際，通常聴者は[A]，[B]二つの意味的不変体を参照し，利用するという．

[A] An A is not different from other A's.
(All A's are the same.)
(あるAは他のAと違わない．
[すべてのAは同じである．])

[B] This cannot change.
(これは変わらない．)

また，彼女によれば，(11)，(12)のように反復語が“ユニークな対象(unique entities)”を指示する同語反復文の場合には，聴者は知識[C]を援用するという．

(11) East is east.

(12) Samantha is Samantha, and you are you.

[C] This cannot be denied.
(Nobody could say that this is not true.)
(これを否定することはできない．
[誰もこれが真実でないとはいえないであろう．])

4.2.2. 特定の同語反復文に適用される言語知識　こうした，あらゆる同語反復文に適用できる言語知識に加え，Wierzbicka(1987)は，一部の同語反復文のみに適用される言語知識もあると指摘する．彼女によれば，英語の同語反復文には，冠詞の有無，反復語の単数・複数の違い，および，反復語が何らかの特別な意味的カテゴリーに属するか否かによって“マーク(mark)”されるいくつかのパターンがあり，それらのパターンごとに慣習化された一定の言語知識が記憶から引き出されるという．それゆえ，Wierzbickaの考えに従えば，人はそうした微妙な表現形式上の違いをも手がかりとしながら同語反復文を解釈していることになる．彼女はそうした英語同語反復文のパターンを“下位構文(sub-construction)”と呼ぶ．そして，英語を母語とする聴者は少なくとも3種の下位構文（の知識）を保持していると指摘し，それぞれ“複雑な人間の行為に対する真摯な態度(sober attitude toward complex human activities)”の同語反復文，“人間の性質に対する寛容(tolerance for human nature)”の同語反復文，“義務(obligation)”の同語反復文と名づけている[2]．

“複雑な人間の行為に対する真摯な態度”の同語反復文:
反復語が，単数形をとり，かつ無冠詞で用いられ，かつ，
相互作用を伴う複雑な人間の行為を表わす．

---

[2] Wierzbicka(1987)は，紙面の都合で取り上げることができないと断りながら，これら三つ以外にも下位構文があるとほのめかしている．ただ，Wierzbicka(1987)はもちろん，その後の彼女の論文の中にも，それに言及した記述はないようである．

Wierzbicka(1987)は，この下位構文にあてはまる同語反復文の例として，(13)，(14)((3)に同じ)，(15)などを挙げている．

(13) War is war.

(14) Business is business.

(15) Politics is politics.

Wierzbickaによれば，この下位構文にあてはまる同語反復文がもつ反復語によって指示される対象は，特殊な状況での行為あるいは別の世界で起こる出来事であり，そうした行為は大目に見なければならず，また避けることのできない否定的側面をもつ，という．そして，この下位構文にあてはまる同語反復文から，聴者は，そのような複雑な人間の行為に対し“真摯な態度”で接する必要がある，といったニュアンスを推論するとしている．

“人間の性質に対する寛容”の同語反復文:

反復語が，複数形をとり，かつ無冠詞で用いられ，かつ，
人間を表わす．

この下位構文に適合する同語反復文としては，(16)，(17)，(18)などが挙げられている．

(16) Boys are boys.

(17) Kids are kids.

(18) Women are women.

彼女によれば，この下位構文に適合する同語反復文は，人はある種の人間の行動に対しては寛容である必要がある，といったニュアンスで解釈される，という．つまり，「boy」，「kid」，「woman」といった類の人間は他の人々がそうすべきだと思うやり方でものごとを行うことができないのだ，とでもいうようなニュアンスが導き出されるという．加えて，彼女によれば，この下位構文には，(19)((8)と同じ)のように，習性を表す助動詞「will」をつけて発話される場合が含まれると指摘している．

(19) Boys will be boys.

Wierzbickaは，“複雑な人間の行為に対する真摯な態度”の下位構文にあてはまる同語反復文から引き出される意味と，“人間の性質に対する寛容”の下位構文にあてはまる同語反復文から導き出される意味とは，互いに類似しているが，以下の点で異なると説明している．すなわち，前者の意味には反復語の“悪い(bad)”側面が含意されるが，後者の意味にはそれがない．たとえば，同語反復文(15)から聴者は，政治が“汚い仕事”であるというニュアンスを推論するが，(16)，(17)，(18)をそれと類似した意味合いで理解することはない，とのことである．

“義務”の同語反復文:

反復語が，単数形をとり，かつ，定冠詞または不定冠詞づきで用いられ，かつ，義務を表わす．

彼女は，“義務”の同語反復文の例として，(20)，(21)，(22)などを挙げている．

(20) The law is the law.

(21) A deal is a deal.

(22) A promise is a promise.

彼女によれば，この下位構文にあてはまる同語反復文は，たとえ実行したくなくとも実行しなければならないというニュアンスで解釈されるという．たとえば，(22)は，「たとえそうしたくなくても法律は守らなければならない」とでも表現できるような意味で受け取られるとしている．

4.2.3. “下位構文”の有効性 “下位構文”なる知識を仮定することによって，英語同語反復文の意味解釈はよりよく説明されるようになるのであろうか？

本稿の第2節で，文脈から単離されて与えられた場合であっても，ある種の同語反復文は他よりも容認しやすい（(5)と(6)を見てほしい）ことのあることを指摘した．Wierzbicka (1987)は，この点に関し直接的には何も触れていないが，彼女の見解に基づいてこうした事実を説明するとすれば，下位構文によくあてはまる同語反復文ほど他よりも解釈しやすい，ということになるであろう．このことは，間接的ながら，たとえば，彼女の次のような指摘に示されているといえるかもしれない．

(23) a. War is war.
b. A war is a war.

(24) a. A promise is a promise.
b. Promises are promises.

Wierzbickaによれば，(23a)は，“複雑な人間の行為に対する真摯な態度”の同語反復文のみに非常によくあてはまり，たとえば「しょせん戦争は悲惨なもので，そういうものとして戦争を受け入れなければならない」というような意味に容易に解釈されるという．これに対し，(23b)は，何らかの下位構文に適合するとすれば，“義務”の同語反復文に該当することになり，たとえば「人は戦争に関わる何らかの義務を果たさねばならない」というような解釈を与えられることになる，という．逆に，(24a)（(22)に同じ）は，もっぱら“義務”の同語反復文としてきわめて認知されやすく，たとえば「約束は守りたくなくても守らなければならない」というような意味に解釈されるのに対し，(24b)は，結果的に，（どのような下位構文にあてはまることになるのか彼女は明言していない[3]が，）「約束は約束にすぎない．約束が常にあてになるとは限らない」といった解釈がなされるとしている．

ところで，英語を母語としない者にとっては“人間の性質に対する寛容”の下位構文の条件に適合しているように思え，それゆえそれに対応する意味をもつものとして解釈できると考えざるを得ない同語反復文であるにもかかわらず，その下位構文にあてはまる意味をもつものとして解釈できない同語反復文があることをWierzbicka自ら認めている．(25)や(26)の文例がそうである．

(25) ? Nazis are Nazis.

(26) ? Rapists are rapists.

彼女によれば，「Nazis」や「rapist」のような名詞によって指示される対象はあまりに悪すぎるので，人がそれらに寛容さを求める可能性がほとんどなく，そのために(25)，(26)

---

3) Wierzbicka(1987)は，論文中の“下位構文”の説明以外の箇所で，多くの英語同語反復文の例を挙げておきながら，その一部については解釈のみを与えどのような下位構文に該当するのかにまったく言及していない．おそらく，そうした同語反復文は，脚注2)で触れたように，論文中に記されなかった下位構文に属するのではないかと推測される．

のような同語反復文はきわめて解釈しにくい，という．このことは，「Nazis」や「rapist」といった名詞が，“人間の性質に対する寛容”にあてはまる反復語のカテゴリーに属していないことを意味しているといえるかもしれない．もしそうだとするならば，そしてWierzbickaの説明がより詳細かつ妥当なものとなることを望むならば，“人間の性質に対する寛容”の反復語に対する条件の中に，たとえば，人間の性質の「悪さ」の程度を条件の中に盛り込むなどして，「Nazis」，「rapist」などが明確に除外されるようにする必要があるであろう．

また，Wierzbickaは，ある種の同語反復文は複数の下位構文にあてはまる場合があり，その結果，多義性が生じる可能性があるとしている．そして，そうした場合，一般に聴者は，同語反復文の置かれた文脈や状況に関する知識を参照しながら妥当な解釈を下す，としている．こうした例として，彼女は，(27)を挙げる．

(27) A mother is a mother.

彼女によれば，この同語反復文(27)は，文脈・状況によって「母親には母親としての義務がある」というような意味に解釈されたり，「（どんなに他の母親と違うように見えても）母親は絶えず母親たる仕方で振舞う」とでもいうように解釈されたりするという．

4.3. Fraser(1988)の研究

Fraser(1988)は，Wierzbicka(1987)の考えに異論を唱える．彼は，“下位構文”なる言語知識を人が有しているという仮定が妥当でないことを，いくつかの反例を挙げて説明している．

(28) The law is the law.

(29) Negotiations are negotiations.

(30) A deal is a deal.

(31) Love is love.

たとえば，文(28)（(20)に同じ），(29)，(30)（(21)に同じ）は，いずれも“複雑な人間の行為に対する真摯な態度”の下位構文に対する要件のうちの統語的な要件，すなわち反復語が無冠詞で使われかつ単数形であることを満足しないにもかかわらず，その下位構

文にあてはまる意味をもつものとして解釈できる[4]．

また，逆に，例文(31)は，“複雑な人間の行為に対する真摯な態度”の下位構文の統語的要件および（反復語に対する）意味的要件の両方を充たしていながら，その下位構文の意味をもつものとして解釈できない，などである．

Fraserは，同語反復文が適格(well-formed)となるか否かが，Wierzbickaの言うような冠詞の有無と種類，反復語の単数・複数の違い，および反復語の意味的性質によって決定されるのではなく，むしろ同語反復文をとりまく文脈・状況が何らかの解釈にうまく導き得るかどうかで決まる，という考えを述べている．この点では，彼の考えは，先に紹介したLevinson(1983)と似ている．

たとえば，彼によれば，(32)のような同語反復文は，文脈から単離されて与えられるときわめて解釈しにくいものの，「風がたこを飛ばすのに都合の悪い方向から吹いてきていることに不満を言う人に向かって発話された」とすれば，それを意味ある同語反復文として受け取れるようになる，という．

(32) Wind is wind.

ただし，Fraserは，Levinson(1983)とは異なり，同語反復文の意味が文脈・状況のみによって決まるとは考えていない．彼は，Wierzbicka(1987)の主張する“意味的不変体”よりずっと一般的で漠然としてはいるが，すべての同語反復文に対し無条件に適用される慣習的な言語知識があると主張する．彼によれば，そうした言語知識は，下記の[A]，[B]，[C]のようなものであるという．彼は，そうした知識を会話参加者間で共有される一種の信念と捉えている．

[A] 反復語によって指示されるあらゆる対象に対し，
話者は何らかの見解を主張している．

[B] 聴者がこの特定の(particular)見解に気づくことができると
話者は信じている．

[C] この見解は会話に関係している．

---

4) 例文(28)，(30)は，Wierzbicka(1987)自身によっては“義務”の同語反復文に適合する例として挙げられている．

つまり，Fraserは，すべての同語反復文に共通する意味が，[A]，[B]，[C]のようなものに過ぎず，実際に聴者が受け取っている同語反復文の意味の多くは，文脈・状況に照らし引き出されたものである，と考えている．この考えを支持する例として，彼は，同一の同語反復文であっても文脈・状況が変わると異なって解釈されることがある，ことを挙げる．たとえば，文(33)（(3)，(14)と同じ）は，文脈・状況次第で，「あらゆる仕事は同じである」という意味や「仕事は無慈悲である」という意味，さらには「仕事はお金になる」というような意味に解釈され得るという訳である．

(33) Business is business.

彼の仮定する同語反復文に関する言語知識[A]，[B]，[C]のうち，[A]は，反復語ばかりではなく主語一般に適用される言語知識と見なしても差し支えないかもしれない．また，[B]，[C]にしても，同語反復文のみに対する言語知識というよりは，あらゆる種類の発話・言語表現に適用される一般的な言語知識と考える方がよいかもしれない．同語反復文に適用される何らかの慣習化された言語知識があるとするならば，同語反復文のみに特定的にあてはまるそれを指摘してもらいたいところではある．

4.4. Glucksberg and Keysar(1990)の研究

これまで述べてきた見解は，いずれも言語学者によるものであった．こうした言語学の立場からのアプローチに加え，心理学的な見地に立った同語反復文の意味解釈の考察も行われてきている．本節および次節で紹介する研究などがそうである．

Glucksberg and Keysar(1990)は，同語反復文の意味解釈の仕方が，主語と述語が異なる(34)の形式をもつ名詞述語文の意味解釈の仕方と同じであると主張する．それゆえ，彼らの考え方に従えば，取り立てて同語反復文に特別な意味解釈の仕方はないことになる．

(34) (ART)A be (ART)B. (A, B: 名詞)

彼らによれば，人は，あらゆる名詞述語文を，クラス包含関係(class-inclusion relation)を表わす文，すなわち事例(token)Aが集合(type)Bの事例であることを示す文としてか，あるいは同一関係(identity relation)を表す文としてかのいずれかに受け取るという．

(35) Boys are boys.

(36) A tree is a plant.

たとえば，彼らは，同語反復文(35)を解釈する仕方が，(36)のようなクラス包含関係を表す文を解釈する仕方とまったく同じであると主張する．すなわち，(35)の主語「boys」は少年の特定の事例群を指示し，述語の「boys」は「少年らしいやり方で振舞う人」といった一種の集合概念を指示するものとして受け取られ，文全体としては，ある特定の少年がその集合の成員であることを表していると解釈される，としている．

しかしながら，こうした単純なクラス包含関係に基づくだけでは，明らかに説明しきれない事実がある．一般に，無冠詞の名詞は特定の個体や集合を指示しない（小泉，1989）．それゆえ，Glucksberg and Keysarの説明は，無冠詞で用いられている同語反復文（たとえば，文例(3)）の場合にはあてはまらないであろう．彼らは，反復語が定冠詞づきで用いられているか不定冠詞づきで使われているか，あるいは冠詞があるか否かといった相違が，同語反復文の解釈にどのように影響するかについてまったく触れていない．

また，前節において，反復語のみの違いによって同語反復文の解釈のしやすさに差が生じるという事実（(5)，(6)の例文を参照されたい）に言及した．この事実もクラス包含関係の観点からは説明できない．なぜなら，それは単語そのものに関する現象であり，クラス包含関係のような単語間の関係に関する事実ではないからである．彼らは，同語反復文解釈時に聴者の参照する反復語それ自体の意味的性質に何ら言及していない．

4.5. Gibbs and McCarrell(1991)の研究

Gibbs and McCarrell(1991)は，ここまで紹介してきた諸研究の考え方をいろいろと取り込みながら，多角的に同語反復文の意味解釈を説明しようと試みている．彼らは，基本的には，前節のGlucksberg and Keysar(1990)と同様な立場に立つ．すなわち，彼らは聴者が同語反復文をクラス包含関係を表わす文として受け取ると考える．また，彼らは，先に述べたWierzbicka(1987)の見解の一部を引用し，反復語の単数・複数の違いにより同語反復文の解釈が異なるとも仮定する．彼らによれば，複数形の同語反復文の場合，主語の指示する特定の事例群が述語の指示するカテゴリーの“ステレオタイプ”的事例群である，と解釈されやすいという．その理由は，複数形の反復語の方が集合概念を指示していると解釈されやすく，その分ステレオタイプが引き出されやすいため，としている．(37a)と(37b)を見てほしい．

(37) a. Boys will be boys.
　　 b. A boy is a boy.

Gibbs and McCarrellは，たとえば「少年は手に負えないもので，言う通りにさせるのは難

しい」という意味を伝えるためには，表現(37a)が用いられなければならず，(37b)では，そもそもその意味が分かりにくいとしている．

彼らの考えに従えば，(38)の文が(37a)のように慣習的ではないのにもかかわらず，英語を母語とする聴者にとって，解釈しやすいことを説明できる．すなわち，複数形をもつ(38)は，(37b)よりも「boy」のステレオタイプを引き出しやすく，したがって，文全体の解釈もしやすい，ということになる訳である．

(38) Boys are boys.

また，彼らは，単数形の同語反復文は，その反復語がステレオタイプを想起させやすい場合には，複数形の同語反復文と同様に解釈され，そうでない場合には「ある概念のどのような事例も他の事例と同等である」とでもいうような意味をもつものとして解釈される，としている．

Gibbs and McCarrellは，反復語がその概念の“ステレオタイプ”を想起させやすいかどうかで，その同語反復文の解釈のしやすさが変わるという点を強調している．たとえば，彼らは(39a)（(8)，(35)，(37a)と同じ）が(39b)に比べ解釈しやすいと指摘する．

(39) a. Boys will be boys.
b. Girls will be girls.

その理由として，彼らは，アメリカ社会では「boy」に対して一般的にあてはまるステレオタイプ的知識を話者・聴者が共有しているのに対し，「girl」に対してはこのようなステレオタイプ的知識を共有していないという事実を挙げている．

Gibbs and McCarrellによれば，以上の意味の他に，同語反復文は，Fraser(1988)が指摘するようなあらゆる同語反復文にあてはまる一般的な話者の信念，および文脈・状況に基づいて個別的に推論される具体的な話者の信念をも聴者に伝える，という．彼らによれば，どのような同語反復文も，反復語によって指示されるすべての対象に対し話者が何らかの見解を主張しており，聴者自身がこの特別な見解に気づくことができ，その見解が会話に関係している，というような信念を伝達する，という．

(40) Business is business.

また，たとえば，同語反復文(40)（(3)，(14)，(33)と同じ）は，文脈・状況次第で，「仕事は競争である」というような話者の信念を伝えたり，あるいは，「仕事は金銭的な利得

を与えるものである」というような信念を伝達したりする，という．

5. まとめ

本稿(Ⅰ)のまとめとして，ここで，前節で展望した英語同語反復文の意味解釈に関する諸研究の議論を，次の観点から整理しておきたいと思う．聴者が同語反復文をどの程度特定の文脈・状況と関係なく解釈すると考えているか？

Levinson(1983)によれば，聴者は，あらゆる文脈・状況に一般的にあてはまる推論の原理を用い同語反復文の根幹をなす意味を解釈し，さらに，一つ一つの文脈・状況に個別的に適合する推論の原理を使い，枝葉の意味を付加する，という．彼に従えば，文脈・状況に置かれなければ同語反復文を解釈できないことになる．

Wierzbicka(1987)は，Levinson(1983)とは対極的な見解を採る．Wierzbickaは，あらゆる同語反復文にあてはまる言語知識（単語と同様の意味的不変体とみなされる），および，いくつかの同語反復文のみに適用されるパターン的言語知識（“下位構文”と呼ばれる）を英語母語話者が有していると主張する．彼女によれば，聴者はそれら言語知識を特定の文脈・状況とは関わりなく同語反復文に適用するため，その意味解釈は基本的に文脈独立的に行われる，ことになる．

Fraser(1988)は，聴者が母語話者の間で共有されている一種の信念をあらゆる同語反復文に適用し，それらを解釈すると主張する．彼の言う信念とは，話者が反復語に対し抱いている特定の見解を聴者が容易に認識できるはずである，といった漠然とした知識を指す．彼によれば，そうした信念を聴者は文脈・状況とは無関係に同語反復文に適用するが，その結果得られる意味は実際の同語反復文の意味の一部分にすぎず，聴者は残りの意味の大部分を文脈・状況に照らし決定する，とする．したがって，彼の考えでは，同語反復文の意味解釈は，いくらかは文脈独立的に定まるものの，ほとんど文脈依存的に決定されることになる．

Glucksberg and Keysar(1990)は，同語反復文の意味解釈が，基本的に名詞述語文のそれとまったく同じであり，同語反復文が一種のクラス包含関係を表すものとして解釈されると主張する．

Gibbs and McCarrell(1991)は，本稿で紹介したWierzbicka(1987)，Fraser(1988)，Glucksberg and Keysar(1990)の考えを折衷した案を主張している．折衷の結果として，彼らの説明では，同語反復文の意味解釈は，Wierzbickaほどには文脈独立的に定まらないが，Fraserほど文脈依存的でもなくなっている．彼らによれば，聴者は，文脈・状況に依存しない意味的処理を行ったり，特定の文脈・状況に依存させた解釈を行ったりして，以下の4種類の意味あるいは信念を受け取るという．すなわち，反復語の単数・複数の違いに関す

る表層表現の知識を基に引き出される意味，反復語に関するステレオタイプ的な世界知識に照らし導き出される意味，同語反復文という表現形式に関する知識から引き出される一般的な話者の信念，および同語反復文の置かれた文脈・状況の知識に基づいて推論される具体的な話者の信念，である．

こうして見てくると，英語同語反復文の意味がどのように解釈されるかということに対する説明には，文脈・状況に関する知識，言語知識，世界知識，話者または聴者の信念というように，言語理解の過程において聴者が参照するとされている知識源が一通り現れているのが分かる．従来から，人間の言語理解過程においてはいろいろな種類の知識源からの情報が利用され，また，各種の処理がそれぞれ異なったレベルで遂行される，という指摘が数多くなされてきている（たとえば，Hobbs, 1979, 1982; Winograd, 1977, など）．同語反復文に対しても，聴者が，それらの知識源のすべてを利用し，いろいろなレベルで解釈のための処理を進めていっていることは十分に考えられる．それゆえ，今後の研究の方向としては，たとえばGibbs and McCarrell(1991)の取り組みに見られるように，多くの知識源のさまざまな知識を仮定しつつ，それらの内容およびそれら各種の知識の適用過程をより詳細・妥当に明らかにしていくことが必要といえるかもしれない．

さて，Wierzbicka(1987)やGibbs and McCarrell(1991)のように，反復語の単数・複数の違いや冠詞の有無によって意味解釈の仕方が異なるとする説明は，英語のような，冠詞を有し名詞の単数・複数の区別を表現上で明確に行なう言語にはよくあてはまるかもしれない．しかし，そうした説明は，言語特異的(language-specific)な制約を前提とした説明であり，他の言語の同語反復文の意味解釈にそのまま適用できるとは限らない．そうした言語特異的な制約が英語同語反復文の意味解釈に働くとすれば，日本語のような，冠詞が担う情報や名詞が指示するものごとの数量を明確に表現しない言語では，いったいどのような制約の下で個々の同語反復文の意味解釈が遂行されていることになるのであろうか．本研究の後半(II)では，こうした点を中心に日本語の同語反復文の意味解釈のなされ方を考察してみる．そして，その後に，英語と日本語の同語反復文の意味解釈の対照比較を試み，さらには，同語反復文の意味解釈の普遍性へと考察を進めていきたいと思う．

引用文献

Brown, P., & Levinson, S. (1978). Universals in language usage: Politeness phenomena. In E. N. Goody (Ed.), Questions and politeness: Strategies in social interaction (pp. 56-310). Cambridge: Cambridge University Press.

Clark, H. H., & Gerrig, R. J. (1984). On the pretense theory of irony. Journal of Experimental Psychology: General, 113, 121-126.

Fraser, B. (1988). Motor oil is motor oil: An account of English nominal tautologies. Journal of Pragmatics, 12, 2 15-220.

Gibbs, R. W. (1982). A critical examination of the contribution of literal meaning to understanding nonliteral discourse. Text, 2, 9-27.

Gibbs, R. W. (1983). Do people always process the literal meanings of indirect requests? Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition, 9, 524-533.

Gibbs, R. W. (1984). Literal meaning and psychological theory. Cognitive Science, 8, 275-304.

Gibbs, R. W. (1986). What makes some indirect speech acts conventional? Journal of Memory and Language, 25, 181-196.

Gibbs, R. W., & MacCarrell, N. S. (1990). Why boys will be boys and girls will be girls: Understanding colloquial tautologies. Journal of Psycholinguistic Research, 19, 125-145.

Gildea, P., & Glucksberg, S. (1983). On understanding metaphor: The role of context. Journal of verbal learning and verbal behavior, 22, 577-590.

Glucksberg, S., & Keysar, B. (1990). Understanding Metaphorical Comparisons: Beyond Similarity. Psychological Review, 97, 3-18.

Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In P. Cole & J. Morgan (Eds.), Syntax and semantics, Vol.3, Speech acts (pp. 41-58). New York: Academic Press.

Grice, H. P. (1978). Some further notes on logic and conversation. In P. Cole, & J. Morgan (Eds.), Syntax and semantics, Vol.9, Pragmatics (pp. 113-128). New York: Academic Press.

Hobbs, J. (1979). Coherence and coreference. Cognitive Science, 3, 67-90.

Hobbs, J. (1982). Towards an understanding of coherence in discourse. In W. G. Lehnert & M. H. Ringle (Eds.), Strategies for natural language processing

(pp. 223-243). Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.

Jorgensen, J., Miller, G. A., & Sperber, D. (1984). Test of the mention theory of Irony. Journal of Experimental Psychology: General, 113, 112-120.

金子康朗・佐山公一・阿部純一 (1986). 修辞表現理解過程における“逸脱”の検出. Hokkaido Behavioral Science Report, Series P, Supplement, No.45.

Kreuz, R. J., & Glucksberg, S. (1989). How to be sarcastic: The echoic reminder theory of verbal irony. Journal of Experimental Psychology: General, 118, 374-386.

小泉賢吉郎 (1989). 英語の中の複数と冠詞: 日本人は本当に英語を理解しているか. ジャパンタイムズ社.

Levinson, S. (1983). Pragmatics. Cambridge: Cambridge University Press. (レヴィンソン S. C. 安井稔・奥田夏子(訳). 英語語用論: Pragmatics. 研究社出版.)

Ortony, A. (1979). Beyond literal similarity. Psychological Review, 86, 161-180.

Ortony, A., Schallert, D. L., Reynolds, R. E., & Antos, S. J. (1978). Interpreting metaphors and idioms: Some effects of context on comprehension. Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior, 17, 465-477.

佐山公一・阿部純一 (1988a). 修辞理解の認知過程: 同語反復文の場合(隠喩文との比較). 日本認知科学会第5回大会発表論文集, 72-73.

佐山公一・阿部純一 (1988b). 同語反復文の理解過程. 日本心理学会第52回大会発表論文集, 783.

佐山公一・阿部純一 (1991a). 同語反復文と隠喩文の意味解釈過程を支える概念知識構造の提案: 典型性と顕著性の概念ネットワーク上での表現. 日本認知科学会第8回大会発表論文集, 72-73.

佐山公一・阿部純一 (1991b). 日本語名詞述語文の意味解釈過程のモデル化(III): “典型性”の概念ネットワーク上での表現. 日本心理学会第55回大会発表論文集, 380.

佐山公一・阿部純一 (印刷中). 日本語同語反復文の意味解釈: 反復語および文脈の関わり. 心理学研究.

Sperber, D. (1984). Verbal irony: Pretense or echoic mention? Journal of Experimental Psychology: General, 113, 130-136.

Sperber, D., & Wilson, D. (1986). Relevance: Communication and cognition. Oxford: Basil Blackwell Ltd.

Wierzbicka, A. (1987). Boys will be boys: 'Radical semantics' vs. 'Radical pragmatics'. Language, 63, 95-114.

Winograd, T. (1977). A framework for understanding discourse. In M. A. Just & P. A. Carpenter (Eds.), Cognitive processes in comprehension (pp. 63-88). Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.

山梨正明 (1986). 発話行為. (新英文法選書12). 大修館書店.